

## ジェイムズの脳の伝達機能説 : 霊魂の不滅の問題

吉田, 正史

<https://doi.org/10.15017/1430733>

---

出版情報 : 哲学論文集. 30, pp.93-109, 1994-09-30. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :

# ジェイムズの脳の伝達機能説

—— 靈魂の不滅の問題 ——

吉田正史

## 序

ウィリアム・ジェイムズは、その著『人間の不滅——この教説に対する、予想される二つの反論——』<sup>(1)</sup>の中で、肉体の死後(脳の壊滅後)にも人間の魂は生き永らえろといった人類の枢要な希望を救う学説として、『脳の伝達機能説』the "transmission-theory" of cerebral action なるものを打ち出した。これは、脳の自然科学的研究の成果として提出される靈魂の不滅性に対する否定的見解の氾濫横行を阻止する目的で展開された理論であり、科学の名の下に靈魂の不滅を否認する人々がしばしば自らの主張に対し附与する強制力が、実は単に或る視野の狭さに由来するに過ぎず、本来その否定的言説には靈魂不滅論者たちに改心を迫る権利も無ければ力も無い、ということを露呈するに十分の効力を有していたと思われる。

しかしながら、ジェイムズのこの学説は、「不死」immortality といった、人類の真摯で切実な精神的要求を完全に満足さ

せるものではなかった。とりわけ、厳密に個人<sup>1</sup>の魂が不死であること、それを熱烈に願う人々にとつては、この学説は、あからさまな敵意の感情を抱かせるものではないとしても、多く不満の残るものであった。それというのも、ジェイムズがこの学説によって切り開いてみせる来世の展望は、死後、人間の魂は個性を喪失し、その由つて来たるところの大霊に帰元する、といった感じの、言うなれば何か非常に汎神論的色彩の濃いものだったのである。ジェイムズ自身は、彼の「脳の伝達機能説」は、若干の補足的説明を加えてやれば、人間の魂が完全に個性的な形態においても不死である可能性を十分に開きうるとの見解をとるが、われわれは、残念ながらジェイムズの差し延べる救いの手はそこまで及ばないと見る。小手先の調整を施しただけでは如何とも除き難い、「伝達説」の有する本質的制約が、現世と来世との間の個性の円滑な受け渡しを阻むのだ。たしかに、「伝達説」はわれわれが現世の個性を来世にまで持ち越すことをいかなる意味においても許容するものではない、とまでするのは極論であろうが、少なくとも、伝達説を軸に展開される「死後個性存続」の説が素描する来世の姿と、通常この言葉の響きからわれわれが想い描く来世像との間には、余程の懸隔が存すると言わざるを得ない。小論でわれわれが強調したいのはこの点であり、靈魂不滅の信仰がその核心的要素として個性保存の要求を含むとするならば、ジェイムズの学説は著しくその価値を減ぜられることになると思う。

以下先ず、脳科学を楯にとり靈魂の不滅を否定する人々の主張が薄弱な根拠しか有せぬことを暴くジェイムズの議論を検討する。読者はこの作業の過程を通じて、現在一般的にはおそらく相当程度知名度の低いと思われるジェイムズの「脳の伝達機能説」についての基本的理解を得ることになる(第一節)。次いで、この「伝達説」自体に脳科学者たちが当然のごとくに寄せる反論がジェイムズの中で如何ように処理され乗り越えられるかを見る(第二節)。さらに、この学説が出会う、より重大な形而上学上の困難及びそれを取り除くかに見えるジェイムズの所説を検討する。われわれが疑義を差し挟むのはこの段階においてである(第三節)。

はじめに、ジェイムズが広く来世信仰を蝕んでいると考えた、大脳生理学等の与える知見に基づく靈魂不滅否定の論理を  
 確認しよう。ジェイムズは反靈魂不滅論者たちの議論を次のようにまとめている。「科学が、われわれの内的な生は、あのよ  
 く知られた物質、所謂われわれの脳回の『灰白質』の一機能 a function である、ということをお回避できない結論として証明  
 することに一度到達したからには、<sup>(3)</sup> どうしてわれわれは来世の生 life hereafter を信じていることができるか。一体どのよう  
 にして機能というものが、その機能を職つた器官が朽ち果てた後に存続することが可能なのであろうか。」

この種の見解は、たしかに、近代自然科学の教養を身につけた人々の集まりにあつて、来世の生といった古い観念を否定  
 するための議論として最も評判のよい見解の一つとなつており、ジェイムズの言うように、こうした見方が一つの大きな困  
 難となつて、来世の生の観念は、かつて人々の信念を惹きつけてきたその力の多くを奪い去られてしまつていゝと言えよう。<sup>(4)</sup>

ジェイムズは、現代精神文明の教養が来世の生といった古くからの観念のうちに見出すこの種の困難を、「われわれがこの  
 現世において知つてゐる限りでのわれわれの精神的な生の脳への絶対的な依存關係」<sup>(5)</sup> the absolute dependence of our spiritual  
 life, as we know it here, upon the brain に関わる困難として規定しているが、實際、精神的な生を脳の機能と見る考え方は  
 らは、精神活動が脳の活動に絶対的に依存するといった考えが容易に導き出され、それがまた直ちに、「脳の活動の停止」は  
 即「精神活動の停止、終焉」を意味するといった考え、すなわち死後の生の否定的見方に結びつくことにもなる。事実、  
 死後の生の否定論者たちの言ひ分はこのようなものであり、「思考一般が脳の諸機能の一つである」という主張や、或は更に  
 踏み込んだ「思考の様々な特別の形態は脳の諸々の特別の部分の機能である」という主張も、<sup>(6)</sup> あたかも精神的な現象が世界  
 における独立変数として存在するかのごとくになおも語る少数のスコラ学者、或はどこかの気のふれた神智学者 theosophist

や心霊研究者 *psychical researcher* を除けば、<sup>(8)</sup> 脳の解剖学者や生理学者や病理学者らの一連の研究成果に支えられた学説として、ともに万人の認めるところであり、この主張が一度承認された上は、そこからはもはや行き着く先死後の生の否定である一本の道筋が残されているのみである、というのが彼らの考えであると言つてよいであろう。

しかし本当に抜け道は無いのであろうか。ジェイムズはここで、たとえ「思考は脳の一機能である」といった心理生理学的な定式を絶対的に打ち立てられた前提として容認したとしても、はたしてこの学説は論理的にわれわれを来世の希望を断念するように強要するものであろうか、といった問いを発するのである。<sup>(9)</sup> そしてジェイムズの考えでは、それは必ずしもそうではないのである。ジェイムズによれば、<sup>(10)</sup> 魂の不死性に対する、思考の脳機能説に依拠した反論は、「厳密な論理においては抑止力を持たない」し、また「来世の希望を断念させる」決定的な結論は、普通考えられているように強制的なものではない」という。ジェイムズは次のように言う。「たとえ（この現世においてわれわれに頭にされている限りでの）われわれの魂の生が、文字通りの厳密さにおいて、滅び行く脳の機能であるとしても、それでもやはり、脳それ自身が活動をやめたときなおもその生が続くことは、少しも不可能なことではなく、むしろ全く以て可能なことなのである。」<sup>(11)</sup>

ではなぜジェイムズはこのように断言することができたのであろうか。ジェイムズによれば、<sup>(12)</sup> 脳の死後に精神的な生が存続することを不可能と決めつける考え方は、精神活動の脳への「機能的依存」*functional dependence* の容認された事実に対する余りにも皮相的な見方に基づくというのである。ジェイムズは言う。「われわれが機能的依存の概念をもつと綿密に研究し、そしてたとえば、機能的依存というものがどのくらいの種類あるかといったことを自問してみるならば、即座にわれわれは、来世の生を全く排除することのないものが少なくとも一種類あるということを認めるのである。」<sup>(13)</sup> つまり、ここでジェイムズは、われわれの精神の脳への機能的依存についての理論には数種が存し、そのうちの少なくとも一つは、その採用がわれわれに来世の門戸を開くものである、と確信しているのであり、生理学者たちの、来世の生を否定する決定的な結論は、彼らが無雑作にそれとは別の種類の理論を採用し、それを唯一想定可能な種類として取り扱うことに由来するに過ぎない、

と批判しているのである。<sup>(14)</sup>

それでは、生理学者たちの採用している理論とはいかなるものであろうか。ジェイムズはそれを「生産説」<sup>(15)</sup> the theory of production と名づけているが、それは、その名称の示す通り、脳がその活動の結果意識を生み出すとする説である。ジェイムズによれば、生理学者が「思考は脳の一機能である」と言うときに考えていることは、彼が「蒸気は湯わかしの一機能である」或は「光は電気回路の一機能である」、乃至は「力は落水の運動の一機能である」と言うときに考えていることと丁度同じ様であるという。<sup>(16)</sup> この後者三つの場合にあつては、「いくつかの物質的なものが内部で、効果 effect を創り出し、産出する機能を有している」ゆえ、「その機能は生産的機能 productive function と呼ばれて然るべきである」とジェイムズは言うのであるが、生理学者たちは、脳についても同様の事情を認め、「脳がコレステリンやクレアチンや炭酸を生ぜしめるのとはほとんど同じ様に、脳はその内部において意識を生み出すのだから、脳のわれわれの魂の生に対する関係もまた生産的機能と呼ばれねばならない」といった主張を展開するに至っている、とジェイムズは考えたのである。<sup>(17)</sup> たしかに、そのような意識の産出を脳の機能とする「生産機能説」に従えば、われわれは、脳という器官が減びるとき、それが果たしていた意識の産出はもはや継続しない以上、魂も間違ひなく滅びる、と結論せざるを得ないことになる。<sup>(18)</sup>

しかしながら、この結論が避け難く思えるのは、与えられた事実に対して、本来数ある中で「生産機能説」という特にその説明方式を当てはめたために過ぎず、その無批判な採用は、そもそも「機能」という言葉を解釈する際の一面的な理解に基づく、<sup>(20)</sup> というのがジェイムズの考えである。事実は、われわれは「機能」解釈に関してより広い選択の幅を有しているということなのである。ジェイムズは言う。「物理的自然界にあつて、われわれはこの種の生産的機能にだけ慣れ親しんでいるわけではない」<sup>(21)</sup>。そこには「解放的ないしは許容的機能」 releasing or permissive function や「伝達の機能」 transmissive function も存するのである。ジェイムズがそのことを例証している箇所を、少々長くなるが、これらの機能理解に資するところ大であると思われるので、ここに引用してみたい。「石弓の引き金は解放的機能を持つ。それは弦を引き留めている障害

を外し、弓を元の形に勢いよく急に戻す。撃鉄が爆発性の化合物の上に打ち降されるときもそうである。それは内的に分子間に存在する障害を打ち崩し、構成ガスを通常の体積へと回復させ、そのようにして爆発が生ずるのを許容するのである。<sup>23)</sup>

「色ガラスやプリズム、或は屈折レンズの事例において、われわれは伝達の〔転移的〕機能 transmissive function を認める。光のエネルギ―は、どのように産出されたにせよ、ガラスによつて色をふるい分けられ制限され、そしてレンズやプリズムによつて或る特定の通路と形へと限定される。同様に、オルガンの鍵は、伝達の機能のみを有する。それは、次々と様々なパイプを開かせ、空気箱の中の風を様々な方向へ逃れさせる。様々なパイプの音色は、外へ出てくるときに震える空気の柱によつて構成されている。しかし、空気はオルガンの中で生まれたのではない。その空気箱から区別された限りでの本来のオルガンとは、空気の多くの部分を特別に限定された形において世界に解放する器具でしかないのである。<sup>24)</sup>（傍点引用者）

このように、物理的自然界には生産的機能からは区別される機能が散見されるが、ジェイムズはこの事実を踏まえて、さらに、「われわれが思考は脳の一機能であるという法則を考へるとき、われわれは生産的機能のみを考へる必要はない。われわれはまた、許容的ないしは伝達の機能を考慮する権利も与えられているのである<sup>25)</sup>」と主張するのである。そして、この「伝達の機能」こそが、ジェイムズの言う、来生の生を排除することのない、機能的依存についての考え方の一つなのであり、通常の心理生理学者たちはわれわれにこうした選択の余地が残されていることを全く考慮に入れていない、と彼は批判する<sup>26)</sup>のである。

ジェイムズのこの批判は大きな意義を有するものと言つてよいであろう。なぜなら、この批判によつて、「思考は脳の一機能である」といった定式を振りかざし、そこから短絡的に死後の生を否定し、靈魂の不滅を不可能と信じて疑わない科学者たちに、彼ら自身のその信念の再考を促す一石を投ずることになる、と思われるからである。実際、もしわれわれの意識の脳への依存の仕方が脳の「伝達の機能」によつて説明されるとすれば、たとえ思考が脳の機能であるとしても、それは、脳が、既にどこか他所で存在を得ていた意識を、われわれに思考として知られる特殊な意識形態へ制限し決定するといった意

味においてそのようなのであり、そこで脳の果たす役割は、一つの独立した存在 *entity* として先在する意識を、或る形状に限定した上で、この世界に登場させることに限られ、脳には、「生産説」の主張するような、意識の本質的存在そのものの供給源としての機能は与えられない以上、脳の壊滅を意識の存在それ自体の消滅に結びつけて考へる何の道理も存せぬこととなり、したがって、われわれの意識的生が肉体の死後も何らかの形で存続する可能性は十分に開かれることになるのである。この辺りの事情を、ジェイムズのヴィジョンに即して、いま少し明らかにしてみよう。

ジェイムズによれば、現世におけるわれわれの意識はその本源を脳に発するのではなく、その源泉は帳の向こうに隠された未知のあの世のうちに *behind the veil* 存する。われわれの脳は、謂ばその帳の中の薄い半透明な場所であり、ジェイムズが「母なる海」<sup>(28)</sup> *mother sea* とか「大いなる貯蔵所」<sup>(29)</sup> *the great reservoir* と呼んだ意識の大元は、その存在の一部を「脳」というこの薄い膜を通過点として、「この世 *here below* に一時的にまた局所的に注ぎ込む。その際、「実在の本当の基」<sup>(30)</sup> *the genuine matter of reality* であり、「諸々の魂の命（その最も十全な形における限りでの命）」<sup>(31)</sup> *the life of souls as it is in its fullness* であるその意識の大元は、脳という限定的伝達者によつて、「この世のわれわれの有限な個性を特徴づける不完全性や差異性のすべて」<sup>(32)</sup> を与えられるのであり、そこでもたらされた意識形態が現世におけるわれわれめいめいの意識形態であるとされる。

この立場からは、一つの脳の崩壊は、舞台裏に先在する「何か精神的なもの」<sup>(33)</sup> *something mental* を個々の意識的存在として制限された形においてこの世に伝えてきた限定の枠組の一つが取り壊されたことを意味するに過ぎず、それは、諸々の魂の命たる、意識の「母なる海」の存否には何の影響も及ばさない。ジェイムズは、ここに靈魂の不滅の可能性を見出したのであった。ジェイムズは言う。「一つの脳が活動を完全に停止するとき、その脳が促進したその特別の意識の流れは、この自然界から完全に消え失せるであろう。しかし、存在のうち、その意識を供給した領域は、手つかずのままなお残存している。そしてそのより真実な世界——意識はこの世に存在している間も、その世界と連続していたのである——において、意識は、

ひよつとしたら、われわれに知られていない仕方でおも存続するのかも知れない。<sup>(34)</sup>

このように、ジェイムズの提唱した「脳の伝達機能説」は、われわれに魂の不死性の或る希望的推測を許すものであったが、しかし、彼の「伝達説」及びそのもたらす来世観が、各方面からの反発を招来する性格のものであったことまた事実である。先ず以て、「伝達説」自体にその矛盾を向けた、自然科学方面からの攻撃が予想されるが、彼らの浴びせる反論と、それに対するジェイムズの再反論を検討することは、これを次節に譲る。

## 二

脳を、意識の産出者ではなくして、その単なる伝達者に過ぎないとする、ジェイムズの「伝達説」そのものに対して、脳の研究に携わる自然科学者たちの多くが、そのようなしろものは想像力の逞しさが生み出した単なる形而上学的仮説に過ぎず、実証的経験によつて裏打ちされた厳密に科学的な理論としては到底通用し難いとして、拒絶の反応を示すであろうことは想像に難くない。彼らに言わせれば、脳が意識を生み出すとする「生産機能説」こそが、脳を研究する様々な分野の自然科学者たちが挙つて指示する学説であつて、それが、勝手な空想の介在なくして、真に実証的に獲得された知識のみによつてもたらされた学問的成果なのである。

しかしながら、ジェイムズは、そうした主張のうちに或る重大な錯誤が潜んでいることを洞破した。実際のところは、「生産説」は、その構成上、肝心な点で、証明されもせず、経験的に示唆されることもない仮説を導入しているのであり、それゆえ、それは、それ自身の主張に反して、純粹に科学的なものではなく、本質的に形而上学的な仮説である、とジェイムズは考へたのである。<sup>(35)</sup>

ジェイムズの言い分はこうである。もしも、われわれが実証的に明確に会得された知識にのみ頼るとすれば、脳の機能と

しては、意識の変化に伴う変化以上のものは確認されないのである。たとえば、「後頭葉を電流が通過するとき、意識はものを見、前頭下部を通過するときには意識はものを考え、電流が停止するときには意識は眠りに陥る」といったように、われわれが明白に知りうるのは、「脳の諸々の活動が或る仕方に変化するとき、意識は別の仕方に変化する」ということだけなのである。ジェイムズは言う。「厳密な科学的知識としては、われわれはただ、単なる相伴の事実を書き記すことができるのみである。」<sup>(36)</sup>そして、ここから先、脳の活動と意識活動が相伴って変化するといった現象が生起する仕方の説明として、「生産」なり「伝達」なりに言及することは、すべて、純粹な仮説を附加することに過ぎず、しかもその仮説は、「生産説」を選択しようが、「伝達説」を選択しようが、「生産」や「伝達」のどちらについてもわれわれがその過程自体の正確で詳細な觀念を形づくることのできない以上、本質的に形而上学的な仮説である、とジェイムズは考えたのである。<sup>(39)</sup>

たしかに、「科学は、伝達にせよ、生産にせよ、その正確な過程を何らか示せと求められるならば、自らの想像力の破綻を告白せ」<sup>(40)</sup>ざるを得ないのであり、とりわけ、脳によつて意識のようなものが生み出されるなどということは、ジェイムズによれば、<sup>(41)</sup>その両項が全く「異質の本性」heterogeneous natures<sup>(42)</sup>であるがゆえに、われわれがやかんの中で蒸気が生み出される在り様を推測的に洞察する場合と異なり、われわれの想像力を如何ほど遅しくしても永久に及ぶことのない、「あたかも思考は自然発生するとか、無から創造されると言うに等しい大奇跡」なのである。ジェイムズは言う。「それゆえ、生産説は、他の考えられうるどんな理論に比べても、ちつとも簡単ではないし、また、他の説と比べて少しでも信頼がおけるかと言えば、少なくとも生産説のみを突き出された場合には、全然そんなことはないのである。それは、ただ、少しばかり一般に普及しているだけである。」<sup>(43)</sup>

「生産説」を、脳の真実を言い当てた、実証科学の揺るぎなき研究成果として通用させようとする人々は、はたして、ジェイムズのこの攻撃に能く持ち堪えるであろうか。もし、彼らがジェイムズのこの議論に対し有効な反論を打ち出せないならば、「伝達説」は、「生産説」の側から放たれる、伝達説は単なる形而上学的仮説との反論を、「お前も同類」tu quoqueと

ばかりに、澄まし顔で一蹴することができるのである。<sup>(44)</sup>

しかしながら、「伝達説」自体は、これを受容可能であるとしても、この学説によって導き出される「不死性」の観念が、そこでもたらされる「不死性」の形態に関して、或る、より深遠でより重大な形而上学の問題を孕むものであったこともまた事実である。次節では、そちらに目を転ずることにしよう。

### 三

ジェイムズの「伝達説」によって与えられる「不死性」は、厳密な意味で個人、の魂が不死であることを保証するものであろうか。これがここでのわれわれの問いである。ジェイムズ自身、この一点に非常に多くの批判者たちの不満が集中したことを、「人間の不滅」の第二版の序において明らかにしている。<sup>(45)</sup>そこでは、批判者たちの名はいちいち列挙されていないが、ジェイムズ自身が彼らの不服の申し立てを次のように要約している。「反対論者たちは言う。もしわれわれのこの世の有限な個人的人格 *personality* というものが、先在するより大きな意識の諸部分が脳を通じて伝達されてきたことに起因するとすれば、脳が死滅した後に残存しうるすべては、より大きな意識たる限りでの意識それ自体であり、当然われわれはその時からその意識と再び混じり合い、それから区別されなくなるであろう。なぜなら、われわれが有限な個人的形態において存在することのできる唯一の手立が途絶えてしまったのだから。

批判者たちは続ける。しかし、これは汎神論的な不死性の観念である。すなわち、それは、世界靈魂における生き残りの観念であつて、キリスト教の不死性の観念<sup>(46)</sup>ではない。キリスト教の不死性の観念とは、厳密に個人的な形態における生き残りを意味するのだ。

彼らは結論する。脳の死後の精神的な生の可能性を示すことにおいて、この講演<sup>(47)</sup>はこうして同時に、その精神的な生が個

人的な生と同一であることの不可能性をも示したのである。個人的な生とは脳の機能だと言うのだから。<sup>(48)</sup>

われわれは、ここで提出された批判は至極当然な正鵠を得た批判であると認めざるを得ないであろう。というのも、ジェイムズ自身が認めているように、彼は「母なる海」ということを汎神論的に響く表現の中で語り、彼自身それを単一体 unit<sup>(49)</sup>として考えていることを示唆するような表現を随所で用いているからである。また、とりわけ、「あらゆる限定というもの」が、哲学者たちの言うように、「実体の」欠如 negation<sup>(50)</sup>であるとすれば、そのことが、脳が強い諸々の特殊な限定のいくつかの喪失は、どうもそんなに絶対的に残念なことではないらしい、ということを立て証するのではなからうか。<sup>(51)</sup>などと語るに至っては、こうした批判が集中砲火のごとく溶びせられたとしても、何の不思議も無からう。

しかしながら、一方ジェイムズ自身は、「少なくとも、自分が一元論的な型の汎神論者でないことだけは確かである」とし、次のように答弁している。「有限な精神が脳によってそこから濾し取られると想定される母なる海は、専ら汎神論的な見地からのみ考えられる必要はない。<sup>(52)</sup>」

ジェイムズは、「伝達説」が最少限要求することは、われわれのこの目下の現世の精神が、それ自身に先在する、より大きな「何か精神的なもの」に由来するということだけなのであり、このより大なる精神があつた世の舞台裏に唯一つしか存在しないのか、或は多数存在するのかは、「伝達説」自体の与り知るところではない、と考えたのである。つまり、ジェイムズは、われわれは帳の向こうの精神的な世界を好きなだけ多くの個体がひしめく世界として思い描くことを許されており、そのことによって「脳が伝達的器官として表象される一般的な図式」は何の損失も被ることがない、と考えたのである。<sup>(53)</sup>

われわれは、「伝達説」を維持したままで、舞台裏に「母なる海」として存する、このより大きな精神に関して、汎神論的見解の極と個体主義的見解の極との間のどの段階にも位置しうるのであり、もし極度に個体重視の見解が採用されたならば、その場合には、そのより大きな精神は、少なくとも一時期には、唯一つの脳を通じてのみこの地上に送り込まれて来るのである、この世の唯一つの人格に固有の源泉としてその存在を限定されることにならう。これは、この世の個々の人格は、そ

れぞれめいめいが背後に、固有の本来の人格を有しており、帳の向こうの世界には、少なくともこの世の意識的存在者と同数以上の精神的存在者が存在している、ということでもあり、この来世の極めて個体主義的な世界観によって、ジェイムズは一元論的汎神論の嫌疑を一先ずは免れるであろう。

しかしそれにしても、ジェイムズの不死性の観念は、この現世の人間個性の来世における保存、継続ということに關して、やはり大きな難点を含むのではないか。たとえ、この世の一意識的存在者が滅んだ後、それが連続していた、それに固有の、より真実でより大なる精神的存在者が、あの世で全く個性的な形態で滅びずに存在し続けるとしても、脳の限定的機能によって生じていたこの世の精神の個性と、脳の限定的機能が効力を失った後に存在するあの世の本来の精神の個性との連絡はどのようにして保たれるのであろうか。一体、前者は後者のうちにどのようにして生き残るのであろうか。この両者はおよそ縁遠いものであつて、われわれは、来世の生へ入るとき、われわれの現世の個性と絶縁せねばならない運命にあるのではなからうか。

この疑問に対し、ジェイムズは、『人間の不滅』の本論では、既に上述したように、死後われわれの個性的制限のいくつかが喪失されることは絶対的に残念なことではないかも知れない、などと返答している<sup>56</sup>のであるが、第二版の序においては、それとは余程趣を変えて、脳の伝達の機能によって生じてくるこの世の人格と、謂ばその大元の人格として舞台裏に存する、それに固有の、より真実でより大なる精神的存在との連絡は、肉体が死滅し脳の伝達の機能が効力を失った後にも、「記憶」memory という形で十分保たれる、との立場を表明している<sup>56</sup>。すなわち、脳の伝達の機能によってこの世に生じた人格は、肉体(脳)の消滅とその運命を共にすることはなく、あの世の本来の人格のうちに記憶という形で生き残るのである。脳の死滅後にそののみが滅びずに生き残ると想定されるあの世の本来の人格は、脳の伝達の機能によって一度地上に登場した以上は、実は、もはや元の古い姿のまま存在し続けるわけではなく、この世の人格の痕跡を留め置いた新たな姿でその命を続けるというわけである。

ジェイムズが来世の人格と現世の人格を連絡すると考えた、この「記憶」の成立の事情については、極粗雑な説明しか与えられていないが、彼によれば、脳は舞台裏の实在を伝達するとき、实在の、帳のこちら側のみならず、帳の向こう側の部分にも或るいくつかの効果を残すという。それは、「一つの物が引き裂かれるとき、どちらの断片も作用を受ける」と同じ理屈だというのである。また、彼は次のような比喩を用いて説明している。「小切手が使用されるときはいつも、取引を記録するために、小切手帳の中に控えが残る。丁度そのように、超越的自己 transcendent self の上に刻印された痕跡は、脳がその媒介者であったところの有限な諸経験の非常に多くの証票となるかも知れない。そして遂には、それらは、より大なる自己のうちにわれわれの地上の経歴の記憶の集積を形成するかも知れない。それはロックの時代以来、心理学によって、あの世にまで渡るわれわれの人格の同一性の連続が意味すると認められてきたすべてなのである。」<sup>59</sup>

しかし、ここでわれわれの主張したいのはこういうことである。ジェイムズがここで言う、超越的自己が現世の人格の記憶を持つという事態は、われわれが現世で過去の自分を憶えているという事態（この事態が成立しているとき、たしかに、われわれの生は過去から引き続いていると言えるのだ）からの単純な類推を許すものではないのではないか。後者では記憶する主体とその対象とを明確に分つことが困難であるのに対し、前者ではそこに明確な断層が存するのではないか。したがってそれは、むしろ何か、他者が過去のわれわれを記憶しているという事態に近いのではないか。われわれがこの世を去った後も誰か他人がわれわれのことを記憶してくれているので、なおもわれわれは脈々として生き続けている、と言うのであるか。比喩的にはそう言うかも知れない。しかし、そこに、「生きている」という言葉の本来の意義は認め難いであろう。

問題は、ジェイムズの言う「より大なる超越的自己」というものがわれわれにとって余りに遠い存在であり、われわれとそれとの間には底知れぬ深淵が横たわっている、という点にあるのだ。というのも、その超越的自己のうちには、われわれがこの世で知っている人格に共通の、われわれに想像可能な要素などまず見出されないので。何となれば、仮定により、われわれにとって近しいものは、すべての脳の伝達機能を介することによってのみ生ずるのだからである。

そして、この近しいもの、すなわち現世でわれわれの知っているすべての意識現象のうちには、おそらく、「生きて、という、こと、に、可、欠、な、」意志の活力」も含まれるとせねばならないのであり、そうであれば、われわれが現世で自覚する、この「意志の活力」は、われわれの死後、超越的自己の内部への参与を許さないのであるから、われわれの死後、超越的自己がわれわれの現世の人格をよしんば記憶してくれているとしても、それは、その人格に、現世からの継続的活動を許すものではないであろう。その人格には生、の力が欠け落ちており、われわれはもはやそこで「個人の魂の不死」を語るわけにはいくまい。

ここにわれわれはジェイムズの「脳の伝達機能説」は真実個体靈魂不滅の要求を満たすものではないと断ぜざるを得ないのである。だがそれではやはり、われわれにとつてそうした要求は如何にしても理不尽なことなのであるか。もし、脳科学に従事する者の多くが主張するように、現世的の心理過程が大腦の生理過程の厳密な意味での関数 function であり、両者の間に完全な因果関係——常に後者が独立変数であり前者がその従属変数であるといった意味での——が成立しているということが、科学上確定された基本的事実であるとすれば、<sup>(6)</sup>「思考は脳の機能である」という命題が殆ど公理として承認されても然るべき基本前提であるとすれば、<sup>(6)</sup>「残念ながらわれわれは然りと答えざるを得ないであろう。この根本命題を、ジェイムズのそうしたように、最大限樂觀的に理解したとしても、せいぜい、死後われわれの個々の魂は宇宙的世界靈魂のうちに、それ自身としては全く不活性な、記憶、たる、限り、で、の、記憶としてその痕跡を留め置くらしい（世界靈魂をより細分化された形態において理解したとしても事情は同じである）、ということが言える程度である。だがそのことは、われわれの見てきたように、決して個体靈魂不滅の要求を満たすものではないのである。

だがもしこの根本仮定が、普通信じられている如く磐石の固きに基礎を置くものではなく、打倒の余地の十分あるものであるとすればどうであろうか。その場合、個体靈魂不滅の信仰は俄然光明に照らされることにならう。そして實際われわれは、心と脳についてのベルクソンの理論は、<sup>(6)</sup>死後にも現世的の意識が本質的、変化を被ることなく、存続する高次の蓋然性を示

す程度にまでこの根本仮定を砕しえたと思う。だがバルクソン説を検討することは、これをすべて別の機会に委ねたいと思う。

註

- (1) *Human Immortality : Two Supposed Objections to the Doctrine* (Boston and New York : Houghton mifflin, 1898). Second ed. with preface containing replies to criticisms, 1899. 但「使用したテキストは『Essays in Religion and Morality (The Works of William James : Ninth Title : vol. 11), Harvard University Press, 1982 に所収のものであり、引用の頁数もすべてこれに依った。尚、同書は以下 HI と略す。
- (2) HI, p. 76.
- (3) HI, p. 79. だが、「靈魂の不滅」といった古くからの教説に対する現代的反論として、ジェイムズが予想した二つのものうちの一つである。いま一つの反論は、「不死性が真実である場合に、不死であると信じられねばならない存在者の数に関わる困難に基づくものである(HI, p. 96)」。しかし、小論では、後者の反論をめぐるジェイムズの議論を取り扱う余裕はない。
- (4) (5) HI, p. 79. (6) (7) HI, p. 80.
- (8) (9) HI, p. 81.
- (10) (11) (12) (13) HI, p. 82.
- (14) HI, pp. 82-83. (15) HI, p. 83.
- (16) (17) (18) (19) HI, p. 84.
- (20) HI, p. 87. (21) (22) HI, p. 85.
- (23) HI, pp. 85-86.
- (24) HI, p. 86. 訳文中「transmissive に「転移的」の訳語を当てたが、大阪産業大学の三橋浩教授は一貫してこの訳語を通しておられる(『ジェイムズ経験論の周辺』、法律文化社、昭和六一年、第八章、第四節)。

- (25) (26) HI, p. 86. (27) HI, p. 87.  
 (28) HI, p. 94. (29) HI, p. 95.  
 (30) (31) (32) HI, p. 87. (33) HI, p. 89, n. 5.  
 (34) HI, p. 87. (35) HI, pp. 88-89.  
 (36) (37) (38) (39) (40) HI, p. 88.  
 (41) HI, pp. 88-89.  
 (42) ジェイムズの著作に多少とも親しんだ者なら、彼のこの言葉に、ジェイムズ哲学の基調から外れた何か突拍子もないものを感じるであろう。心理的諸事実と物理的諸事実とを二つの異質の本性のうちに理解する把握は、それこそがジェイムズの唱えた「根本的経験論」radical empiricismの基軸をなす「純粹経験」pure experienceの説が突破しようとしたところのものではないのか。「純粹経験」の立場が心と物との間に認める唯一の区別は、原初の中立的な単一の事実(純粹経験)が、それが受けとられる二つの異なった文脈のうちで果たす役割に基づいてなされる機能論的区別であり、心と物とを二元的対置の構図のうちに理解し、両者の間に実体的に区別を設けることは、そのきつぱりと拒絶するところではないのか。しかるにジェイムズはここで明らかに二元論のうちに身を投じており、これは節操の無い態度ではないのか。これは一体如何なることか。こうした批判を予想してのことか、ジェイムズは『人間の不滅』の註の中で予め次のような釈明を与えている。つまり、不死性に対する生理学的な反論が通常の二元論的思考の次元から生じてくるものである以上、自分も同じ土俵の上に立ち自然科学や常識のとする普通の二元論的観点から二元論の言葉でその反論に応酬するのは、それは当然そうあつてしかるべきだ、というのである。しかればわれわれは、ジェイムズの靈魂不滅論は彼の「純粹経験」の原理から導き出されたものではないと率直に認めるべきなのであるか。たとえば、G・E・マイヤーズは、われわれがジェイムズの著作のうちに見出す、心と体(物)が根本的に対置される二つの実体的entityではないという主張と、心が体を越えて生き永らえるという二つの主張は、まず両立し難いとの見解を示している。G・E・Myers, *William James, His Life and Thought* (New Haven and London, 1986), pp. 57-58, pp. 354-355, p. 477. たしかに、ジェイムズが『人間の不滅』の中で展開した明らかに実体的な議論と、彼の「純粹経験」の立場との間に論理的整合性を求めるのは容易なことではない。だがそのことは、ジェイムズがここでなした議論それ自体の効力をいささかも減ずるものではないであろう。

- (43) HI, p. 90. (44) HI, p. 89.
- (45) HI, p. 75. この批判者たちとの問答の一部が紹介されている書として、R. B. Perry, *The Thought and Character of William James* (Boston, 1935), II, pp. 134-137 を参照。
- (46) 「靈魂の不滅」の形態が、何ゆえキリスト教の「不死性」の觀念と合致せねばならないのか、と反発する向きもあるが、われわれが「不死性」を言う場合、通常先ず念頭にあるのは、「個人の不死性」であろうから、ここでの批判全体は、キリスト教を離れても、十分意味を持つであろう。
- (47) 「人間の不滅」の本文は、初め、インガーソル講義(1898)で発表された。
- (48) (49) HI, p. 75. (50) HI, p. 96.
- (51) HI, p. 75. (52) (53) HI, p. 76.
- (54) われわれがこの句を挿入したのは、われわれが「転生」reincarnationの可能性を考えていたからである。われわれは、「伝達説」それ自体の中には、そのより大きな精神が別の時期に別の脳を通じてこの地上に再登場することを防げるものは何もないと思う。勿論そうした立場をとる場合、われわれは個体主義的見解の極点にいるとは言えないかも知れないが。
- ジェイムズ自身、伝達説によって開かれる不死説が、キリスト教の不死性の觀念よりも、むしろ魂の先在説 *preexistence* や再來說 *re-incarnation* に親近性を有していることを率直に認めている(HI, p. 76)。
- (55) HI, p. 96.
- (56) (57) (58) (59) HI, p. 77.
- (60) William James, *The Principles of Psychology* (1890), Harvard U. Press, 1983, p. 18 及び W. James, *Psychology: Briefer Course* (1892), Harvard U. Press, 1984, pp. 12-13 を参照。
- (61) とりわけわれわれの念頭にあつるのは、*Matière et mémoire* (Paris 1896) と *L'énergie spirituelle* (Paris, 1919) の著作である。